

小川政弘作 「先生 2」

- 吉本先生 君たちは“教育的配慮、教育的配慮”とお題目を唱えてばかりいるが、教育をなんだと考えているんだ？ 校内の秩序を乱す生徒は、それ相応の処分を受ける。これこそ教育ではないのか？ 最近の大学出たての若い教師は一体何を考えているんだ？ 今度は君たちの番だぞ、殴られるのは。体力に自信があるのか知らんが、最近の生徒は、頭は空っぽだが、バカ力だけはあるからな。殴られてから騒ぎ立てたって遅いんだ。
- 田島健作 吉本先生、被害者としてお気持ちは分かりますが、それは少々違うんじゃないでしょうか。規則を破った人間を罰する。それは確かに正論です。悪いやつらはさっさとやめさせる。これは簡単なことです、学校側としては。しかしこれでは問題の“根”はいつまでたっても解決しないんじゃないでしょうか。我々が考えなきゃならないのは、なぜ彼らがそんな暴力や非行に走るのか、ということなんです。
- 吉本 田島先生、それは理想論だよ。(皮肉っぽく) そりゃあんたは若いのに人間ができていらっしゃるから、生徒の信頼も厚くて殴られたことがないから、そんなのん気なことを言っていられるんだ。だがね、わたしゃこれで3度目なんだ。心配で夜もおちおち寝ておれん。我々が今しなきゃならないのは、この暴力をまず排除することじゃないのかね！
- 田島 待ってください、待ってください、吉本先生。おっしゃることは分かります。しかし…(FO)
- 音楽 (重苦しい感じ)
- ナレーション ここは青春中学の職員室。もう時計は夜の8時を回っているというのに、部屋の中は、重苦しい、緊迫した空気が流れていました。事の起こりは、以前から無断欠席や喫煙、他校生徒の暴力事件などでたびたび問題になっていた3年C組の武田駿介が、宿題をやってこなかったことを注意した吉本先生に、いきなり殴りかかったというのです。被害者の吉本先生を始め、担任の鈴木先生や校長先生までが、駿介の処分を主張する中で、ただ一人反対を唱えていたのは、田島健作という英語の先生でした。田島先生は、この学校に勤めて7年余りになる30を出たばかりの先生で、日ごろ、校内暴力について真剣に考え、祈っているクリスチャンでした。そして武田駿介は、小学4年ごろまで、泉教会の教会学校で、田島先生から毎週日曜日、熱心に聖書を学んでいたのです。
- 田島(モノローグ) あの武田が、素直で明るくて、将来はわたしのような先生になるんだと言っていた武田が、どうしてこんなことになってしまったんだ？ この5年間に、一体あいつに何が起こったんだ？ とにかく、このままじゃいけない。あいつを退学処分にしちゃいけない。今あいつが立ち直らなかつたら、彼の一生は取り返しのつかないことになる。
- 吉本 田島先生、田島先生、聞いとるのかね？
- 田島 (我に返り) はい、伺っております。お聞きしながら、先ほどから考えておりました。いかがでしょうか、吉本先生。それから校長先生、あの武田駿介をわたしにしばらくお任せいただけませんかでしょうか？ 彼が子供の時分から、わたしは知っているんです。小学生のころはあんなじゃありませんでした。こうなったのは、背後にきつと何かがあると思うんです。どうぞわたしにそれを調べさせてください。彼が立ち直れるかどうか、今は分かりませんが、とにかくわたしは、最後の処分をする前に、体ごと彼にぶつかってみたいんです。お願いです、どうぞそのチャンスをわたしに下さいませんか?!

吉本 ———いいでしょう。あなたがそれほどまでおっしゃるんなら、武田のことはお任せしましょう。ただし、今度またあれが暴力を振るったら、いいですか田島先生、その時は容赦しませんよ。あれの処分はもちろんのこと、こんな生徒を温存している学校の姿勢を、教育委員会でもどこでも訴えて、正してもらいますからね。

田島 …分かりました。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 田島先生は、重い足取りで下宿に帰りました。自分の言ったことの重大さが、時間がたつにつれ、大きくのしかかってくる思いでした。武田駿介という、若い一人の人間の運命が、今や彼の両肩に背負わされたのです。

田島(祈り) 神様、今日の出来事を感謝します。武田君の処分だけは免れました。しかし彼の責任をわたしが負うことになりました。主よ、わたしはどうすればいいのでしょうか？ 彼のこのごろの行いは、いろんな先生や生徒たちから聞いています。取り付く島もないような荒れ方だそうです。このわたしをさえ避けています。校長先生や担任の先生が今まで何度も注意しても改まらなかったものが、わたしに何ができるのでしょうか？ またもし彼が暴力を振るったら…？ 主よ、助けてください。あなたはかつて、彼を導いて聖書を学ぶ機会を与えられました。彼の心の中には、きっとあなたの愛の言葉が眠っているはずです。どうか、あなたのみ力で、彼の魂を呼び覚ましてください。そのためにわたしはどんなことでもします。どうかわたしに愛と勇気を与えてください。

ナレーション 次の日、田島先生は、事件以来学校に来ていない武田駿介の家を訪れました。家の中はシーンと静まり返っています。2、3度呼び鈴を押した後——

武田駿介 (中から)だれだよ？

田島 武田か。僕だ、田島だ。

駿介 …先生か。なんの用だよ？

田島 うん。この間のこと以来、君が休んでいるって聞いたもんで、“どうしてるかな”と思ってね。

駿介 そんなこと、あんたに関係ねえだろ。帰ってくれよ。

田島 まあそう言うな。鈴木先生やクラスのみんなも心配してるんだ。とにかく会って話そう。ドア開けてくれないか？

効果音 (ドアの開く音)

駿介 見えすえたこと言うなよ。ウソは似合わないぜ、先生。心配してるにしちゃ、電話一つかかってこねえよ。先生だってどうせ校長や吉本にドヤされて説教しにでも来たんだろ。お門違いだよ。——帰ってくれよ。

田島 そんなんじゃないよ、武田。僕は君のことが知りたいんだ。なんであの君がこんなになったのか。きっといろいろなことがあったんだろう。そうでもなきゃ…。

駿介 (さえぎって)うるせえな！ 話すことなんかねえよ。帰れ。帰ってくれよ！

田島 武田、たけ…。

効果音 (ドア、「ビシャン」と閉じる)

ナレーション 田島先生は、重い心を抱きながら帰りました。けれども先生は、ドアを開けた時の、かすかな安どにも似た駿介の表情と、「ウソは似合わない」と言った時の一瞬の心の通い合いに、一筋の望みを見いだしていました。“先生はクリスチャンだろう。あんただけは別だ。別であってほしい”という、駿介の心の奥底にある願いを聞いたような気がしたのです。

それからというもの、田島先生の駿介に対する執念とでもいうようなコンタクトへの試みが続けられました。それと共に、好きな女ができて家に寄り付かない父や、進学に躍起になる母親に反抗して彼がグレたことなど、少しずつ分かってきました。

効果音 (電話のベル)

駿介 (ぶっきらぼうに)はい。

田島 (フィルター音)やあ武田。田島だ。今日ちょっと寄っていいかな。英語もクラスじゃだいぶ進んでるから…。

駿介 (さえぎるように)しつこいんだよ。勉強なんかもう沢山だよ。ほっといてくれよ、先生！

効果音 (電話を「ガチャリ」と切る音)

ナレーション そしてまたある時は――。

駿介の妹 お兄さん、手紙よ。田島先生から。

駿介 またかよ。なんだ？(封を切る)「武田、今日はクラスのみんなで寄せ書きをしました。(田島の声)飯田や中島が中心になって、一人一人を説いて回ったらしい。僕のは英語で書いてあるから、練習のつもりで訳してごらん。飯田と中島は、教会の祈り会でも、君のことを毎週祈ってる。ともかく一度出てきなさい。この寄せ書きに書いたみんなの気持ちがウソかどうか、自分で確かめるんだ。その勇気が君にはあると、僕は信じてる。待ってるぞ。」

ナレーション それから数日後――。

男子 先生、田島先生、武田が、武田が来ました！

田島 ん?! そう、そうか！

ナレーション 田島先生は、思わず心の中で神様に感謝しました。ところが、事件は 3 時間目、吉本先生の時に起こりました。

吉本 武田、それが教師に向かって言う言葉か！ 3 週間も頭を冷やして、少しはマシになったかと思ったらこのザマだ。お前みたいなやつは、人間のクズだ。やめちまえ！

駿介 ――こ、この野郎！田島 (教室に飛び込んできて)待て武田、やめろ！

駿介 チキショー、てめえ！(吉本に殴りかかろうとする。)

ナレーション 逆上した駿介には、自分の殴りかかっている相手が、吉本先生をかばった田島先生であることさえ気づきませんでした。しかも驚いたことに先生は、夢中でこぶしを振り回す彼に、何一つ抵抗せず、なすがままに任せていました。

駿介 (ハッと気づいて)せ、先生…。

田島 ――どうだ、気が済んだか？

駿介 先生。お、おれ…。

田島 いいんだよ。何も言うな。お前は、吉本先生だけじゃない、お父さんや、お母さんや、周りの大人が皆憎かったんだろう。それを今ぶつけたんだ。さあ、吐き出せ。みんな吐き出すんだ。先生は、聞くぞ。

ナレーション その日の夕方、田島先生は、駿介を下宿に連れて帰りました。そして、ポツリポツリと家のことから話し始めた駿介の顔を見ながら、「さあ、新しい始まりだぞ、武田！」とつぶやいたのでした――。

<完>